

しつけるということ



岩 丸 茂 雄

『子どもには子どもの人格があり、おとなの縮図ではない。故におとなの生活を子どもにおしつけてはならない。子どもは子どもらしく伸ばさなければならぬ。』

という考えかたが教育の底流をなしているようです。たいへん結構なことではありますが、私は全面的には賛成致しかねるのであります。私は反問します。

「現代の社会機構や科学生活を考えて、おとなが知っていることで、子どもがまだ知らない面で必要なことは、『こうするものだ。』と教える必要がないだろうか。」

するとこういう答えが出ます。

『それは子どもが理解した暁に、自覚ある行動をとるようになるのだ。それが自主性に基づく行動である。』

私は更にくいさがります。

「知識として理解し、自主的な行動をとるまで待つことのできない事項は、知識的な理解はあとまわしにしても、しつけることの必要はないものだろうか。」

『しつけなどは古い教育方法である。おしつけ教育である。』

ここで私はグーの音も出なくなります。

お前の頭は古いと云われてしまえば、これから勉強して、新しいことを学ばねばなりません。

私はしつけと云うことばを調べてみました。大字典によると「馳」とも「躡」とも書くが、もともと日本古来のことばで、身を花の如く美しくするという意味から組合せた日本で作った文字であります。意味を先にして作った文字を会意と云います。いわば当て字でありますから、正しくは「しつけ」と書くものらしいです。しつけとは裁縫で云うしつけ糸の如く、その形をおしつける為用いることばらしく、なるほど教育的ではないらしいです。

しかしまだ私はあきらめません。次に、一、二の例を挙げて考えてみましょう。

生れたばかりの赤ちゃんが、昼と夜の区別なく泣いたり乳を飲んだりします。それを昼は醒め夜は眠るような生活をさせていくのは、赤ちゃんは理解するのでしょうか。

少し長じて、いつでも食事をしたがる子どもにも、一日三回、おやつを含めて四回ないし五回の食事時間を定めさせるのは、子どもに生理的知識を得させてからするものでしょうか。

更に重大なことは、食前の手洗いは何の爲にするのか、まさか細菌学や病理学の知識を得てから、理解ある行動をするまで待つことが許されるでしょうか。昔の人類は伝染病の伝染経路を知らなかったから、手洗いの必要はただ手のよごれを取るくらいにしか考えなかつたでしょう。そして疫病と称して恐れていました。現代は医学の進歩のおかげで特に胃腸系統の病気の伝染予防は、菌が口に入ることを防ぐことでほとんど完全に効果を挙げることができるとを知り、手洗いは肉眼で見えきれいであるなどということ以外に重要な理由のあることを知っています。だからと云って、子どもにそこまで理解させての行動が期待できるでしょうか。それよりは

「おててを洗いましよ。」

と、まず手を洗うことをし、つける必要を先にすることだと思えます。長ずるにより、知識的裏付けを得て、『なるほどこういう理由からそうしたのか』と納得することでしょう。

こういうふうには、必要なことは、理解という手続きを経ずに（それはまだ理解の能力のない時期のうちに）し、つけておいて、後に理解の裏付けをする教育を「しつけ」と云いたいのです。こういうことはたくさんあると思えます。交通のはげしい街路で遊んではいけないとか、交通機関の利用について注意すべきこととか、子どもの考えだけにまかせておいたら、生命に関するような事故を引起すことがあるでしょう。こんな時には、子どもの要求は無視してまで『こうするもの』と押付ける必要があるでしょう。その方が子どもにとってもありがたいことであるはずです。いわば大乗的な愛情です。

日本は子どもの天国だと云われます。逆に云えばあまりにも甘やかし過ぎるといふことになるのです。『子どもだから……』と云えば、反社会的なことも許されるといふのはどういふものでしょう。『よっぱらいだから……』というよっぱらい天国とともに、困ったものだと思います。外遊してきた人の話を伺うと、外国では相当に強ししつけをしているそうです。

ただ、ここで考えなくてはならないことは、むやみやたらにしつけと称して押付けをしないようにしたいものです。子どもが長じて後、知的理解を得て、なるほどと納得のいくことでなくてはなりません。そしてそれが現在子どもにとって幸福になることでなくてはなりません。親やおとなの御都合主義からくるしつけは厳につしむべきでしょう。

（お茶の水女子大学付属小学校）